

ふつうってなんだろう

福井県 国高小学校

4年 平尾 春樹

ぼくにとって、はしを使って食事をする、くつ下をはく、段差をとびこえることはふつうのことです。でも、ぼくのおじいちゃんにとっては少しむずかしいことです。

ぼくのおじいちゃんは、ぼくが生まれる5ヶ月前に脳こうそくという病気になり、左の手足が不自由になりました。病気になる前はふつうに毎日ほたらいて、ふつうに車を運転して、剣道も好きで、ふつうにしゅみの手料理をみんなにふるまっていたそうです。

だけど、突然「ふつう」を失ってしまったとおじいちゃんは言っていました。病院に入院中は、前はなんでも自分でできたのに、と悲しくなったり、健康な人がうらやましくなったりしたそうです。体の障がいを受け入れられず、苦勞したとのことでした。

でも、もうすぐ生まれてくるぼくを抱っこしたいという強い気持ちで、つらいリハビリにもひたすらたえたそうです。はじめてぼくを抱っこしたときは、落としたりしないか心配しながらも、新しい命の温もりを感じて、とても感動したと教えてくれました。

だから、ぼくにとっておじいちゃんのふつうは、「体が少し不自由」です。おじいちゃんが、シャキシャキ歩く姿は知りません。足首にそう具をつけて、杖をついてゆっくり歩くおじいちゃんがふつうです。くつ下をはくのにしぶい顔をして、時間がかかるおじいちゃんがふつうです。せきが出るので飲み物を一気にグビグビ飲むことができないのも、おじいちゃんのふつうです。おじいちゃんが歩きやすいように、床に落ちてるものを片づけるのがぼくたちのふつうです。

友だちのおじいちゃんのように、学校行事に参加することはむずかしいです。でも、おじいちゃんが作る梅干しは甘みが少なく、すごくすっぱく絶品で、ぼくの大好きです。物知りで、いろいろ家のことも考えて、家族に役立つ道具を作ったりします。毎日せいっぱいがんばるすごい人です。

ぼくはこの作文を書くことで、「ふつうってなんだろう」と考えました。でも、考えても考えてもふつうは人それぞれで、とてもむずかしいと思いました。困っているぼくに、お母さんが教科書にあった「みんながって、みんないい」という金子みすずさんの言葉を教えてくれました。

ぼくのおじいちゃんは体が少し不自由だけれど、だからこそ生活の不便さや人のやさしさに気づくことができます。苦手なことは、周りの人の少しの手伝いややさしい言葉、思いやりでがんばることができると思います。

ぼくは、おじいちゃんのおかげで、困っている人に声をかけることがふつうになりました。ぼくは、おじいちゃんの「ふつう」が大好きです。